

京都幕末の騒動と天気

白石 克

一、はじめに

天気は人間の行動にひどく影響を与えます。朝、目が覚めた時、雨が降っていると、一瞬ではありますが、外出したくなくなります。大事な予定があっても同様です。雨が嫌いな人、好きな人、個人により随分違うことでしょう。私の場合、少なくとも、晴れた日に比べ、行動が鈍くなっていることに相違ありません。極々たまたま、行かないこともあるかもしれませんが、一旦外に出ると、大きな傘を差して歩くことは楽しいものです。底冷えする冬の晩、外を歩くのは嫌なものです。幕末になると、勤皇・佐幕が入り乱れ、しのぎを削り合い、暗殺事件が続きます。案外、寒い晩や雨降る中で行われたりするものです。坂本竜馬と中岡慎太郎が近江屋で襲われた時も（慶応三年十一月十五日）、寒い晩であったことが知られています。精神力が物理的条件を打ち破ることができたのかもしれませんが。江戸時代の都市では、火災を防止するために、極端に火の使用に注意が払われておりました。ですから、手あぶりなど、貧弱な暖房器具しか使えませんでした。当時の人は寒さに強かったことも想像できま

す。文久三年（一八六八）八月一九日、三条実美等七人の公卿が京都から長州目指して落ち延びた「七卿落」の絵を見ると、雨の中を佻しく歩く姿がよくわかります。当時の天気を見ると、確かにその通り、雨中の出発だったのです。

幕末の様々な事件を題材として沢山の脚本や小説・物語が作られてきました。その時の天気を入れたもの、全く無視したものなど、作家によってプロットの組み合わせが皆違います。慶應義塾図書館には『二條家内々御番所日記』（全四二〇余冊）が所蔵され、その中には来客など用向けの記事だけでなく、毎日の天気も記されており、一番古いものは寛永十二年（一六三五）六月一日ですが、二條家の菩提寺二尊院が火災にあった時、随分焼失したといわれています。古い部分は随分欠失しております。それでも、延宝九年（一六八一）八月一日から明治五年（一八七二）四月四日まで、およそ百九十年分は大体連続しております。以前、田口靖子氏（元慶應義塾図書館貴重書室司書）と、四二〇余冊の日記から毎日の天気を書き抜き、「京都の天気表」をまとめてみました（詳細は巻末に記述）。

こうした資料を見ますと、幕末の血なまぐさい事件当日の天候がわかります。作成時には、「これができれば、『鞍馬天狗』を新鮮な気持ちで読める」と期待しておりました。なかなか、思い通りのものではないのです。一つの日記だけでは無理なことなのかもしれません。慶応三年（一八六七）十一月分と十二月分が完全に欠けておりました。重要な二ヶ月間だったのです。この間に、坂本竜馬暗殺（十一月十五日）・王政復古の号令と徳川慶喜の将軍地位剥奪（十二月九日）など、大事件が次々と起こりました。そして翌年一月三日の鳥羽伏見の戦いへ向かいます。それでも、その二ヶ月分は当時の日記などを使えば、十分に補填できます。

また、天候の記述に、よくわからないものが見られます。晴・曇・薄曇・雨・雪・小雪・霰は現在も同様に使いますが、この他に、霽・陰があります。晴と霽は同様に思われます。「霽」には雨がはれる意味がありますが、前日に雨が降った様子のない日でも使用されていますから、単に晴の意味と考えてよいかもしれません。「陰」には「くもる、かげる」の意がありますから、陰と曇も同様に思われます。幾人もの記録者がいるために、用語の違いがあるのかも思いましたが、前後の日で晴・霽や曇・陰を書き分けているところも見られます。この『二條家内々御番所日次記』だけでなく、他の日記にも同様の天気用語が使われています。やはり、「快晴」や「晴曇不定」に相当すると思われる「快霽」や「晴陰不定」もあります。細かなニュアンスの違いがあるのかもしれませんが、同様の天気と考えてよいのでしょうか。これらは全て当時使われた天気の用語だと思えます。『高木在中日記』には「双天」「交天」がありますが、「蒼天」「好天」のことかと思われます。

それぞれの日記によっても、天気表示の記述法が違います。『二條家内々御番所日次記』は事務用の日誌のせいか、晴・曇・雨など、記述が簡単です。公卿たちの日記（後述）は結構詳細です。たとえば、元治元年十二月十九日（西暦一八六五年一月十六日）を例をとりますと、二條家は簡単に「晴」、『中山忠能日記』では「晴巳刻（午前十時頃）後陰夕小風」、『嵯峨実愛日記』では「陰霽交寒氣烈」と、記述法が一様ではありません。西暦では一月十六日ですので、随分寒い一日であったに違いありません。

前述のように、『二條家内々御番所日次記』（以下『二條』と略称）には欠失箇所や未記載箇所が間々あります。或いは、清書する際に起きた誤写箇所があるかもしれません。以下の日記を対照させて当時の天気を考えてみました。

『中山忠能日記』（文久三年—一八六三—六月一日～慶応三年—一八六七—三月十日。補遺に安政六年—一八五九—八月～十月。文久三年—一八六三—一月～五月。明治元年—一八六八—閏四月・十一月十九日から西暦では一八六九年・十二月—一日～四日）、本稿にて『中山』と略称して使用しました。

『嵯峨実愛日記』（元治元年—一八六四—七月一日～慶応三年—一八六七—十二月六日。補遺—慶応三年—一八六七—十二月七日～明治元年—一八六八—十二月三十日—ただし、ここでは明治元年二月まで天気の記事がありません。）略称『嵯峨』

『朝彦親王（中川宮）日記』（元治元年—一八六四—七月十五日～慶応三年—一八六七—九月二九日）略称『朝彦』

『尾崎忠征日記』（慶応二年—一八六六—十月一日～明治元年—一八六八—五月八日。十月五日～十二月十七日）略称『尾崎』

『廣澤真臣日記』（文久三年—一八六三—四月七日～明治四年—一八七一—一月五日。ただし、連続していない）略称『廣澤』

『勧修寺経理日記』（文久三年—一八六三—一月一日～慶応三年十二月。ただし、連続しておらず、天気記載日も少ない）略称『勧修寺』

『木戸孝允日記』（明治元年—一八六八—四月一日～同十年五月六日）略称『木戸』

以上は『日本史籍協会叢書』収録本です。

『高木在中日記（幕末維新京都町人日記）』（平成一刊 「清文堂史料叢書」第三十）（嘉永七年—一八五四—

一月一日〜明治四年十二月二十六日) 略称『高木』

『若山要助日記』(平成九〜十刊 京都市歴史資料館)(嘉永五年一月一日〜慶応三年一月一日) 慶応三年一月一日〜七月十四日が連続記載) 略称『若山』

そこで、『二條家内々御番所日記』を中心に文久元年から明治元年まで、八年間の京都の天気を極々簡単に集計してみました。

万延二年(五月一日に文久と改元) 晴二七七(一年の内、七八%に相当) 雨(雪)四〇日(一年の内、一一%に相当)

文久二年 晴三〇七日(八〇%) 雨(雪)三九日(一〇%) 閏八月あり

文久三年 晴二八一日(七九%) 雨(雪)四一日(一二%)

文久四年(二月二十日に元治と改元) 晴二七三日(七七%) 雨(雪)三九日(一一%)

元治二年(四月七日に慶応と改元) 晴三〇二日(七九%) 雨(雪)五〇日(一三%) 閏五月あり

慶応二年 晴二七三日(七七%) 雨(雪)四七日(一三%)

慶応三年 晴二五五日(七二%) 雨(雪)三四日(三四%) 十一・十二月は『尾崎』による補充

慶応四年(九月八日に明治と改元) 晴二五一日(六六%) 雨(雪)五三日(一四%) 閏四月あり(この年は閏四月に雨が一〇日、五月に一三日あったためか、他の閏年に比べて晴日の総数が少ない)。

これらを見ると、晴日は毎年七〇%から八〇%、雨日は一〇%から一五%ほどあることがわかります。文久二年・慶応元年・明治元年は閏月がありましたので、それぞれ一年の総日数が一ヶ月ほど増加しています。普通の

年では三五四か五日、閏年では三八三か四日あります。

一、京都幕末の騒動と天気

幕末から明治維新にいたる八年間に、京都では御所内で重要会議が度々開かれたり、血なまぐさい事件が連続して起きていました。当日の天候を、上記の日記類を使って調べてみました。

(文久元年—西暦一八六一年)

十月二十日(西暦十一月二十二日)、皇女和宮が將軍家茂と結婚するために、京都を朝六つ時(六時頃)に出発して江戸に向かいました。当日の天気は『二條』『高木』『若山』は晴です。他の資料を見ても同様ですから、幸先よい出発でした。十一月十四日、総勢七千人を越えるともいう大行列は、無事に最後の宿泊地板橋に到着しました。翌十五日、中仙道二十五日間の旅を終え、江戸に入ります。江戸の天気は、前途多難を思わせる小糠雨でした。

(文久二年—一八六二)

四月二十三日(五・二十一)には寺田屋騒動が起きました。

薩摩藩主の父に当たる島津久光が公武合体を立て直すため、兵をつれて上洛しました。その機会に激派の薩摩藩士らが、強風の夜、京都の町に火をつけ拳兵する計画を立てました。久光は彼等に自重を命じましたが、同調しません。同日夜、激派三〇余名が伏見の寺田屋でその準備をしていた時、久光が鎮圧のため送った藩士と乱闘

となり、有馬新七等六人が殺されました。当日、『二條』は晴、『高木』は晴天、『若山』や真木和泉の日記も晴です。『高木』では翌日の記録に「昨夜五ツ時（夜八時頃）…」と書かれています。また、傷ついた久光側藩士の山口金之進が九ツ時分（夜〇時頃）帰ってきたといえますから（大久保一藏の日記）、夜の乱闘事件であることがわかります。西暦では五月下旬のことですから、それほど寒くはなかったと思います。

（文久三年——一八六三）

一月五日（二・二十二）、一橋（徳川）慶喜が入洛しました。『二條』『中山』『高木』『若山』はともに晴です。三月四日（四・二十一）、將軍徳川家茂が入洛しました。『二條』『中山』『高木』『若山』はともに晴です。

三月十一日（四・二十八）、天皇と在京諸大名が攘夷のため、上・下の鴨社に参詣いたしました。天皇・公家・武家が揃って行動するのは前代未聞であると、騒がれました。『二條』は雨、『中山』は「霖未休終日降雨」、『高木』は「雨降」、『若山』は「雨下」ですから、一日中雨が降り続いていたはずはです。

五月十九日（七・四）夜十時頃、攘夷派の公家姉小路公知が御所朔平門を出たところ（猿ヶ辻）で、三人の刺客に暗殺されました。三条実美と並ぶ尊攘派少壮公家の中心人物でした。刺客の一人は薩摩の田中新兵衛といわれています。『二條』は「昼後夕立」、『中山』は「雨冷」、『高木』は「双天：夕立降廻ル、七ツ半時（五時頃）夕立」、『若山』は「夕立」です。

六月九日（七・二十四）、徳川家茂は京都を出発して、大坂（以下「大阪」と表記します）から船で江戸に帰りました。『二條』『高木』『中山』は晴です。翌十日は晴、『中山』は「晴時々催白雨休止」とあります。現在の七月下旬ですから、度々夕立が起きたのでしょう。

八月十八日（九・三十）子の刻過ぎ（午前一時頃）、会津・薩摩を中心とした兵（公武合体派）が御所内の尊攘派を一掃いたしました（八月十八日の政変）。三条実美等過激派公卿の参内を差し止め、長州藩は堺御門警備の任を解かれました。当日、『二條』『高木』『若山』は晴、『中山』は「陰雨不定」です。天気が違うようにも見えます。判断した時間が異なるせいでしょうか。

翌十九日暁、三条実美、三条西季知、東久世通禧、壬生基修、四条隆譚、沢宣嘉、錦小路頼徳の七卿と長州藩兵が妙法院から、長州に向かいました（七卿落）。『二條』は雨、『中山』は「小雨」、『高木』は「雨降。夜同断」、『若山』は「雨下」です。雨の中を蓑笠草鞋姿で竹田街道を行く「七卿落の凶」や錦絵「七卿西走之凶（右田年英）」の様子に納得することができます。翌二十日の天気を見ると、『二條』『高木』は雨、『中山』は「陰雨」と記されています。

十月三日（十一・十三）、島津久光が一万の兵を率いて京都に入りました。『二條』『高木』『若山』は晴、『中山』は「晴時々曇小雨」と複雑な天気です。大まかな記述では、『二條』のように、晴なのでしょう。

十一月二十六日（二八六四・一・五）に一橋（徳川）慶喜が上洛し、東本願寺の旅宿に入りました。『二條』『高木』『若山』は晴、『中山』は「晴寒」です。西暦では一月初めですから、ひどく寒かったと思います。

十二月三十日（一八六四・二・七）、一橋（徳川）慶喜・松平容保・松平慶永・山内豊信・伊達宗城が朝議参与に命じられました。『中山』は「晴末（午後二時頃）後陰」、『高木』は「曇天」、『若山』は「晴、昼後曇、少々雨」、『二條』は欠けています。昼過ぎから曇り日になったのでしょうか。

ただし、参与会議は三ヶ月後の翌年三月九日（一八六四・四・十四）に解散しました。幕府と薩摩藩との協力

には、始めから無理がありました。『二條』『中山』『高木』『若山』はともに晴です。

(文久四年―一八六四)(同年二月二十日より「元治」に改元)

一月十五日(二・二十二)、徳川家茂が二度目の上洛をしました。『中山』は「晴陰」、『高木』は「双天」、『若山』は晴です。『二條』には天気の記事がありません。

五月七日(六・十)朝六ツ時過ぎ(六時過)に、家茂は離京しました。『二條』『中山』はともに雨、『高木』は曇天です。参与会議の解散後、公武合体派の大名たちは次々京都を離れました。その結果、尊攘派の志士たちが京都に潜入するようになりました。

六月五日(七・八)、河原町三条東入北側の池田屋に、肥後の宮部鼎蔵・萩の吉田稔麿・土佐の望月亀弥太等四十名が会合をしておりました。情報を聞いた新撰組は、守護職や所司代の兵とともに夜八時に攻める予定でした。ところが、その時間になっても守護職などの兵は来なかったため、十時になり新選組だけ(わずか十人)で攻め込みました。その後遅れて、守護職の兵も集まり、池田屋を取り囲んで、激闘が続きました。宮部鼎蔵・吉田稔麿等七名が殺され、二十三名が逮捕されました(池田屋事件)。『二條』は「朝曇」、『中山』は「陰午後雨」、『高木』は「雨降夜双天」、『若山』は晴です。夜は雨が上がったようです。

六月十日(七・十三)、夜に入り、新撰組と会津藩兵が、清水産寧坂の料亭明保野に不穩浪士がいるとの情報を受け、同亭に踏み込みこみました。池田屋事件の残党狩りの予定でしたが、浪士はおらず、誤って現場に居合わせた土佐藩士麻田時太郎を負傷させてしまいました。両者とも公武合体派の同志でしたので、後に問題が残りました(明保野亭事件)。当日、『二條』『若山』は晴、『中山』は「晴陰辰刻(午前八時頃)小雨」、夜の天気は

よかったです。翌十一日は『二條』は晴、『中山』は「霽曇不定」、「高木」は曇天です。

七月十一日（八・十二）、佐久間象山が三条木屋町にて肥後藩士河上玄斎に殺されました。『二條』『嵯峨』『高木』『若山』は晴、『中山』は「晴此比日々遠雷」です。暑い一日であったと思います。

七月十九日（八・二十）早朝、長州軍と京都守護軍との間で戦端が開かれました。長州軍は御所西側の蛤御門を中心に主力を集中し、激戦となりましたが、結局は力及ばず、一日で敗れました。尊攘派の長州軍は先年の八月十八日の政変で、京都を追われました。その後、公武合体派のまとまりが崩れ、攘夷派を討ち取る池田屋事件などが起きたように、彼等がまた台頭してまいりました。長州藩の来島又兵衛・久坂玄瑞・真木和泉等は、世子毛利定広が率いる本体が到着する前に挙兵しました（蛤御門の変、或いは禁門の変）。『二條』『中山』『朝彦』『若山』は晴、『嵯峨』は「晴炎暑甚」、「高木」は曇天です。夏の真つ盛りでひどく暑い一日であったようです。その後、戦火が市街に広がり大火となりました。大半を焼失して、やっと二十一日に鎮火しました（どンドン焼け、鉄砲焼け）。焼失家屋は二万七千余戸に及びました。

長州軍は前日、十八日の夜半から行動を起こしていました。前日の天気は『中山』『朝彦』『高木』『若山』は晴、『嵯峨』は「晴陰朝小雨」です。『二條』は欠失しています。この日も暑かったはずです。

翌二十日の天気を見ますと、『二條』『若山』は晴、『中山』は「陰小北風焼失如昨夜寅前俄冷天明復暑」、「嵯峨」は「晴炎熱熾」と、ひどい暑さのことがわかります。鎮火した翌々二十一日は『中山』『嵯峨』『朝彦』『高木』はいずれも晴、『二條』は欠失しています。

七月二十三日（八・二十四）、朝廷は幕府に、御所に向けて発砲した長州藩を征討する命を下しました。『中山』

は「晴暑小風」、『嵯峨』は「晴陰夕晴」、『高木』『若山』は晴天です。『二條』には天気が記載されておりません。暑さは続いております。

九月二十一日（十・二十一）、征長総督に任じられた徳川慶勝（前尾張藩主）が上洛して、知恩院に泊まりました。『二條』『中山』『嵯峨』『高木』『若山』はともに晴です。この年は六月六日（七・九）から八月七日（九・七）まで晴が続きました。

十月十五日（十一・十四）、慶勝は大阪まで出陣しました。『二條』は晴、『中山』は「陰雨」、『嵯峨』は「辰半頃（午前九時頃）晴巳時（十時頃）後再雨」、『高木』は「雨降」、『若山』は「雨下」です。変わりやすい複雑な空模様でした。幕府軍は広島と小倉に十五万を超える軍勢を配して、長州領を取り囲んだといわれています。

（元治二年——一八六五）（同年四月七日より「慶応」に改元）

慶応元年四月二十八日（一八六五・五・二二）、小御所で第二次征長の朝議が行われました。『朝彦』を見ると午後が集まっています。『二條』は「半雨」、『中山』は「雨未（午後二時頃）後晴西前（夕六時頃）地震増昨夕」、『嵯峨』は「甚雨午刻（昼頃）後晴」、『朝彦』は「従前晩大風雨酉刻（夕六時頃）北地動」、『高木』は「雨降」、『若山』は「雨下」です。雨は午後から霽れていますが、夕方には、昨晚より大きな地震が起きています。

閏五月二十二日（七・十四）、將軍徳川家茂が上洛して、申半頃（夕五時頃）小御所に参内しました。『二條』は晴、『高木』は曇天、『中山』は「陰雨」、『嵯峨』は「陰小雨」、『朝彦』は雨、『若山』は「雨下」です。『二條』だけ違います。天気を判定した時間が異なるのかもしれませんが。

同閏五月二十五日（七・十七）、家茂は第二時長州征伐のために、大坂城（以下「大阪城」と表記する）に入

りました。京都では『二條』『朝彦』『若山』は晴、『中山』は「晴巳刻（午前十時頃）以降時々陰夕雨似時雨」、『嵯峨』は「晴雲東北行西南風頻扇申刻（午後四時頃）遇夕立」、『高木』は「双天七ツ半時俄ニ夕立、夜双天」です。夏の日差しなのでしょう。夕立も起きています。京都と大阪ではさほど変わらないと思います。

九月二十一日（十一・九）、家茂が参内、御所御学問所にて対面し、兵庫開港と長州再征を奏上しました。『二條』『若山』は晴、『中山』は「晴或陰巳（午前十時）前雨下夕晴」、『嵯峨』は「晴陰時雨夕快晴」、『朝彦』は「時雨」、『高木』は「双天折々時雨降」です。変わりやすい天気でした。

（慶応二年——一八六六）

一月二十一日（三・七）、京都の薩摩藩邸で薩摩藩代表の小松帯刀・西郷隆盛と長州藩代表の木戸孝允（桂小五郎）が土佐藩の坂本龍馬の立会いのもとで、薩長連合の盟約をいたしました。盟約は薩摩・長州藩の約束でなく、有志による約束事に過ぎませんが、後に両藩が倒幕の中心となるべく出発点となりました。『二條』『若山』は晴、『中山』は「陰寒夜雨終夜不止」、『嵯峨』は「薄陰巳時（午前十時頃）後晴夕立陰入夜雨降」、『朝彦』『高木』は曇です。寒い一日だったようです。

一月二十二日（三・八）、一橋慶喜等が参内し長州藩処分の寛典を奏請しました。退出は丑刻（朝二時頃）です。『二條』『朝彦』は雨、『中山』は「雨夕休止」、『嵯峨』は「雨降午時（昼十二時）後晴雲南行余寒強」、『高木』は「雨降。夜双天」、『若山』は「雨下」です。両日とも寒い一日であったようです（次項参照）。

一月二十三日（三・九）、坂本竜馬が伏見寺田屋で伏見奉行所の捕吏に襲われました。竜馬は夜〇時頃到着して風呂に入った後といえますから、深夜の事件です。婦人のお竜の機転によって、危なく難を逃れましたことは

有名です。『二條』『朝彦』『高木』『若山』は晴、『中山』は「午後寒有雪氣」、『嵯峨』は「晴雲南行余寒甚北風寒」です。『嵯峨』を見ると、北風が吹くひどい寒さであったようです。翌二十四日の天気も晴ですので、厳しい寒さの中での襲撃であったことがわかります。

六月七日（七・十八）、幕府軍は軍艦から大島口で発砲し、第二次長州征伐が始まりました。次いで十四日（七・二十五）に安芸口、十六日（七・二十七）に石州口、十七日（七・二十八）に小倉口で戦闘が開かれました。ところが、いずれも、幕府軍の敗走に終わります。京都の六月七日の天気は『二條』は雨、『中山』は「晴未（午後二時頃）後雷」、『高木』は曇天、『若山』は「夕立」です。祇園祭の当日でした。

七月二十日（八・二十九）、將軍徳川家茂が二十一歳で、陣中大阪城内にて病死しました。京都の天気を見ると、『二條』『若山』は晴、『中山』は「陰已過晴」、『嵯峨』は「陰雲東北行時々晴今日有蒸暑之氣」、『朝彦』『高木』は曇です。大阪もほぼ同様と思います。蒸し暑い日に起きた大事でした。

八月七日（九・十五）・八日（九・十六）は、大風雨が襲い、各地に被害が出ました。現在の九月中旬に相当しますから、恐らく台風が京都・大阪を襲ったものと思われれます。

『二條』は「雨亥剋（夜十時頃）ヨリ強風雨八日暁二至止」、『中山』は「自昨終日甚雨似梅天霖夜雨」、『朝彦』は「大雨」、『高木』は「雨降夜同断。九ツ時方俄二大風類に吹、明六ツ時二止」、『若山』は「雨下」です。激しい雨であったことがわかります。翌八日は『二條』『高木』は雨、『中山』は「雨暁子刻（〇時頃）過天明南烈風雨尚降未頃（午後二時頃）晴夕小雨」、『嵯峨』は「晴雲東行風自西南来日影暖照天氣頗長閑」、『若山』は「昨夜子ノ刻（〇時頃）より大風雨交り、今暁卯ノ刻（六時頃）漸々鎮り候」。夜が明けてから、雨が霽れてきま

す。

九月十九日（十・二十七）、幕府は征長軍の撤兵を命じました。幕府軍は総大将家茂が没し、長州領の四口とも敗走するという、厳しい立場でした。『二條』『嵯峨』『朝彦』『勧修寺』『高木』『若山』は晴、『尾崎』は陰です。

十二月五日（一八六七・一・十）、二条城で徳川（一橋）慶喜に対する將軍宣下が行われました。『二條』『勧修寺』『若山』は晴、『中山』は「晴陰不定寒嵐」、『高木』は交天です。風の吹く寒い日であったことがわかります。

十二月二十五日（一八六七・一・三十）、孝明天皇が没しました。急死したといわれています。第二次長州征伐中、大阪城で將軍家茂が没しますと、征長の停止を幕府に指示しました。『二條』『中山』『朝彦』『勧修寺』『高木』は雨、『嵯峨』は「雨下雲西行北行或南歩自夕雨休」、『若山』は「雨下」です。

（慶応三年——一八六七）

一月四日（二・八）、孝明天皇の皇太子睦仁（明治天皇）が踐祚・即位しました。『二條』『中山』『勧修寺』『高木』『若山』は晴、『嵯峨』は「快晴無浮雲午後雲出南方歩南風寒吹」、『朝彦』『尾崎』は快晴です。西暦では二月上旬ですから、寒い一日であったと思います。

五月十一日（六・十三）中岡慎太郎は小松帯刀邸において、板垣退助等を西郷隆盛に紹介し、密かに薩摩と土佐の間に倒幕の密約を結び、山内容堂の決意をうながしました。『二條』『中山』『勧修寺』『高木』『若山』は晴、『朝彦』は曇、『嵯峨』は「宿雨新晴天色愉快雲南行暑氣頗相加」です。前日の十日は雨天でした。

六月二十二日（七・二十三）、京都三本木の吉田屋にて、土佐藩の後藤象二郎・福岡孝弟・坂本龍馬等と薩摩藩の小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通等との間で盟約（協定）ができました。將軍の政權奉還と、朝廷のもとに諸侯会議を基軸とするという、政治運営をめざしました（薩土盟約）。『二條』『高木』『若山』は晴、『中山』は「晴暑午後有小風」、『嵯峨』は「陰晴巳刻（午前十時頃）後晴炎暑熾南風吹」、『朝彦』は「朝曇」、『尾崎』は「陰晴半暑強」です。七月下旬ですから、もう炎暑になっております。

十月十三日（十一・八）、徳川慶喜は十万石以上の在京諸大名の重臣を二条城に集めて、朝廷への政權返上奏案を諮り、翌十四日（十一・九）大政奉還の上表文を武家伝奏日野資宗・同飛鳥井雅典に提出しました（大政奉還）。十三日の天気は『二條』は「朝曇」、『中山』は晴、『嵯峨』は「晴陰午刻後雲収風静天気長閑似春光」、『尾崎』は「快霽」、奉還当日の十四日は『二條』『勸修寺』は晴、『中山』は霽、『嵯峨』は「快晴小春風景長閑」、『尾崎』は快霽、『高木』は曇天です。表現こそ違いますが、大体晴といってよいのかもしれない。

十月十五日（十一・十）、小御所で会議が行われ、徳川慶喜の大政奉還は勅許されました。慶喜にとっては、期待に反した結末といわれています。『二條』『中山』『高木』は晴、『嵯峨』は「快晴如春長閑」、『尾崎』は「快霽」です。小春日和の一日でした。

十月二十四日（十一・十九）、徳川慶喜は征夷大將軍辭職を願いました。『二條』『勸修寺』『高木』は晴、『中山』は「晴夜雨」、『嵯峨』は「快晴自夕陰」、『尾崎』は「快霽」です。

十月二十七日（十一・二十二）、朝廷は慶喜の願いを却下しました。『二條』『尾崎』『勸修寺』『高木』は晴、『中山』は「晴風後寒」、『嵯峨』は「快晴小春天色長閑」です。昼間は小春日和でしたが、後に寒くなったのか

もれません。『中山』には、「後寒」と書かれています。

十一月十五日(十二・十)、坂本竜馬と中岡慎太郎が近江屋(河原町通蛸薬師下る)で襲われました。幕府見廻組の佐々木唯三郎等によるものといわれています。竜馬はほぼ即死、慎太郎は二日後の十七日に没しました。菊屋の峯吉が竜馬に頼まれて軍鶏肉を持ってきたのが、五つ半過(九時頃)で、その時、既に事件は起きていました。現在の八時半過ぎのことと思われます。『嵯峨』は「雨降辰半(朝九時頃)後雨休午後晴雨交雲南行」、『尾崎』は「陰晴半」、『高木』は「雨降」です。寒い夜であったといわれています。雨交じりの天気であったようです。慎太郎が絶命した十七日も寒い日で、『嵯峨』には「晴陰時雨風寒午刻晴」、『高木』は双天です。

十一月十八日(十二・十三)、御陵衛士隊長伊東甲子太郎が夜八時から九時頃、堀川七条油小路付近で、新撰組に暗殺されました。近藤勇暗殺を計画しているという情報を得た新撰組の計略にかかり、帰り道に待ち伏せされました。『嵯峨』は「晴雲南歩天氣似陽春」、『尾崎』は「晴夜快霽」、『高木』は晴天です。この日は暖かかったです。

十二月七日(一八六七・一・一)、海援隊と十津川郷士中井庄五郎は、油小路通花屋町の旅館天満屋を襲撃しました。坂本竜馬暗殺を新撰組の仕業と勘違いして、紀州藩公用人三浦休五郎と新撰組隊士が会食しているところでした。この事件で、中井庄五郎と近藤勇の甥の宮川信吉が殺されました(天満屋騒動)。『尾崎』は快晴、『高木』は双天です。前述のように、『二條』は十一月・十二月の二ヶ月分を欠いております。

十二月八日(一八六七・一・二)、長州藩主父子の官位が復帰して、入洛も許され、岩倉等の追放公家の復帰が決定されました。『尾崎』は快霽、『高木』は晴天です。

十二月九日（一八六七・一・三）、王政復古の「告諭」（いわゆる「大号令」）が発表されました。倒幕派公卿と、尾張・越前・土佐・安芸・薩摩の五藩によるクーデターです。小御所会議で、將軍徳川慶喜の地位剥奪と領地没収が決定されました。『尾崎』は快晴、『高木』は晴天です。

十二月十二日（一・六）、徳川慶喜は薩長との一戦を避けるために、二条城より大阪城に向かいました。『尾崎』は快霽、『高木』は晴天です。

十二月二十八日（一・二十二）、徳川慶喜は率兵入洛を決意しました。『尾崎』は「陰折々小雨」、『高木』は曇天です。

慶喜は公議政体派に期待しておりました。ところが、幕府は薩摩など討幕派の江戸での挑発・擾乱工作にのって、十二月二十五日（一・十九）、江戸薩摩藩邸を焼打ちしてしまいました。江戸から幕府軍が続々と上阪し、慶喜は戦いを制止することができなくなりました。大晦日から元旦にかけて、伏見で幕軍と討幕軍が睨み合う形勢でした。

（慶応四年―一八六七）（九月八日より「明治」に改元）

慶応四年一月三日（一・二十七）、午後五時過ぎより、鳥羽・伏見の順に戦闘が始まりました。初日の兵力を見ますと、幕府軍は兵力一万余、討幕軍は三千余でした。三日夜、伏見では白兵戦を主体とする幕軍の会津兵が討幕軍と戦いになりました。会津兵は銃撃戦をとる討幕軍に敗れ、夜半過ぎには中書島まで後退しました。『二條』は晴、『尾崎』は快霽、『高木』は曇天です。現在の一月末ですから、夜半の寒さは厳しいものであったはず

です。

翌日四日も幕府軍は劣勢で、淀まで後退しました。この日の朝、仁和寺宮嘉彰親王が征討大將軍に就任、ここで官軍（政府軍）ができましたので、劣勢気味の幕府軍は賊軍となり、益々厳しい立場になってまいりました。更に淀川の東に位置する淀藩と西岸の山崎を固めていた津藩が、官軍方になりましたので、その後も五日・六日と、幕府軍は崩れて大阪城まで退却しました。六日夜には、総大将の徳川慶喜が、戦闘中の兵を残したまま、松平容保・板倉勝静ら数人の側近を連れただけで、船で江戸に帰ってしまいました（十二日江戸着）（鳥羽・伏見の戦い）。そうした事情で、七日には戦争は終息しました。一月四日は『二條』が晴、『尾崎』は「陰晴半」、『高木』は双天、同五日は『尾崎』は「陰晴半」、『高木』は晴天、『二條』は天気未記載、同六日は『二條』『高木』は晴、『尾崎』は「陰晴半」、同七日は『二條』『高木』は晴、『尾崎』は天気未記載です。大晦日の夜は雪でしたが、元旦から七日まで、毎日晴れていたようです。

同七日（一・三十一）、政府は徳川慶喜追討令を出していました。上述のように晴天です。

同日、政府は伏見で救米施行を行いました。

一月十五日（二・八）、旧幕府の米蔵を開いて、淀方面の兵難者に施行しました。『二條』は晴、『尾崎』は「陰晴半」、『廣澤』は雪、『高木』は「小雨降夜双天」です。

二月九日（三・二）、東征大総督が置かれ、有栖川宮熾仁親王が総督、参謀には西郷隆盛・板垣退助が任命されました。『二條』『尾崎』は快晴、『廣澤』『高木』は晴です。

二月十五日（三・八）、東征大総府大総督は江戸に向け進発しました。『二條』は晴、『尾崎』は快晴、『廣澤』は陰、『高木』は「交天。夜同断」です。幸先よい出発となりました。山科の郷士で結成された山科隊も従軍し、

五月三十日、江戸に到着しました。

二月三十日（三・二十三）、知恩院・南禅寺・相国寺が英・仏・蘭三国公使の滞在所となりました。『二條』『廣澤』は晴、『尾崎』は「陰午後晴」、『高木』は「小雨降」です。

三月十四日（四・六）、明治天皇が御所紫宸殿にて、公卿・諸侯・文武百官を率いて「五箇条御誓文」を発表しました。翌十五日に江戸総攻撃を予定していました。『二條』『廣澤』『高木』は晴、『嵯峨』は快晴、『尾崎』は快霽です。

三月二十六日（四・十八）、大阪津村別院に滞在中の明治天皇は、大阪港で各藩の軍艦を視察して、日本初めての観艦式を行いました。京都の天気は『二條』『廣澤』は晴、『嵯峨』は「陰巳刻（十時頃）と晴催薄暑」、『尾崎』は快霽、『高木』は双天です。大阪も京都と同様、上天気であったと思われます。

九月二十日（明治元年、一九六八・十一・四）、天皇が東京行幸に出発しました。『二條』は曇、『嵯峨』『木戸』『高木』は晴、『廣澤』は「快晴午後曇」です。『木戸』を見ると、朝九時頃に出発したようです。各日記の記述が少し異なっておりますが、恐らく晴れていたものと思われます。幸先よい出発でした。年末に至り、京都に還幸しました。

十月十三日（十一・二十六）、天皇は江戸城に入城して、東京城と改める詔を出しました。既に七月十七日（九・三）、江戸を東京に改称する詔書が発せられております。当日、斉藤月岑の『武江年表』を見ると、東京の天気は快晴でした。天皇に供奉しました木戸孝允の日記には、「今日一天無雲風静にして如春日出」と記されています。出発・到着とも上天気と見てよいと思います。京都市民は東京遷都に対する不安を感じていました。京

都の天気は『二條』は「高木」晴、『嵯峨』は「快晴西風寒氷閉」です。

十二月二十二日（一八六九・二・三二）、東京を十二月八日に出発した天皇は京都に還幸しました。『二條』『高木』は晴、『嵯峨』は「晴雲東北歩天明後快霽」です。『武江年表』には「西京へ一旦還幸あり。来三月、東京へ御着輦あり」と記されています。

（明治二年——一八六九）

一月五日（二・十五）、横井小楠が御所参賀の帰途、寺町丸太町下ルを駕籠でさしかかったところ、覆面の壮士に斬殺されました。『二條』は雨、『嵯峨』は「晴雲西北歩敷」、『木戸』は晴、『高木』は交天です。『二條』だけが雨です。或は日記を清書した際に、誤写してしまったのかもしれませんが。

三月七日（四・十八）、天皇は東京に向け行幸（結果的には遷都）しました。山科隊も供奉しています。そして三月二十八日（五・九）に東京城に入城しました。城中に太政官府を設置して遷都の形をとりました。京都出発の日、『二條』は雨、『嵯峨』は「陰雲東北行夕より細雨」、『廣澤』は「朝陰昼後雨」、『木戸』は「曇午後雨五時（午前五時）御発輦」、『高木』は「曇天、折々小雨降」です。午前五時頃出発ですから、曇日での出発であったと思われます。木戸孝允は、西洋の時間を使っていたように思われます。

九月四日（十・八）、大村益次郎が三条木屋町の旅館二階で食事中に刺客に襲われました。その傷がもとで十一月五日（十二・七）に死亡しました。『二條』『高木』は晴、『嵯峨』は「終日降雨沛然深冷入夜猶雨下」、『木戸』は雨。一月五日と同様、晴・雨の両者があるのが不思議です。

十月五日（十一・八）、皇后が東京行啓に出発しました。『嵯峨』は「雨降雲南歩終日終夜降雨寒冷深」、『廣澤』

は雨、『高木』は「雨降、夜交天」です。一日中雨で、しかも冷たい雨であったようです。『二條』は十月から十二月まで、三ヶ月分を欠失しております。東京遷都反対の中を、雨中での出発となりました。

三、おわりに

様々な事件や重要儀式時の天気がわかりますと、その時の情景が、より明瞭に復元できるものです。度々起きた暗殺事件・七卿落・蛤御門の変・大政奉還時の二条城・鳥羽伏見の戦い・明治天皇の遷都行幸などの事件と当日の天気を合わせて考えてみますと、その場の様子が、よりわかってくるような気がします。右のような幕末の大きな事件をみていきますと、どうやら晴日が多いようです。寺田屋事件・八月十八日の政変・蛤御門の変・戦火による三日間の大火、鳥羽伏見の戦い（五日間）は全て晴れています。蛤御門の変後の大火（ごんごん焼け、鉄砲焼け）が鎮火できなかったのは、かんかん照りのせいかもしれません。七月十九日（西暦八月二十日）から三日間続いた火災ですから、厳しいものでした。鳥羽伏見の戦いを見えますと、元旦（西暦一月二十五日）は『二條』や『大久保利通日記』が雪、『尾崎』が大霽です。天気が異っているように思われます。ところが『高木』は前日の大晦日が「双天：夜六ツ時（六時頃）と雪降」、元旦が「晴天：夜晴天」です。元旦の午前中には雪は止み、積もっていたのかもしれない。元旦から徳川慶喜が江戸に逃げる六日夜まで晴が続きました。翌七日も晴れました。連日冷え込んでいたことと思われれます。晴続きの天候が、討幕軍と幕府軍の実力の差を、そのまま増大させたように思われます。連日の晴天は、大砲・銃など近代兵器を多く持つ討幕軍にとって有利な展開

に導いたはずですが。こうした天候のもとでは、白兵戦を主体とした幕府軍は、奇襲や逆転の機会に恵まれなかったとも思われます。雨や大雪であったなら、また別の結果になったかもしれません。総崩れまでもう少し、時間を稼げたかもしれません。

余談になりますが、天気とは別に、幕府軍が敗北した原因の一つに、「ナンバ歩き」を掲げる人もおります。江戸時代の日本人は右手・右足、左手・左足と、片側の手足を一緒に動かす、ナンバ歩きであったといえます。キリンの歩き方と同じです。討幕軍は中心が薩長軍ですので、少なくとも幕府軍よりは、西洋の軍事訓練を受けていた人が多かったといえます。ナンバでは、なかなかスピードアップができません。ですから、ナンバで逃げる幕府軍は次々薩長軍に追いつかれ、斬られてしまったというわけです。今も幼稚園の運動会で、子どもたちの行進を見ていると、たまにナンバ歩きの子がおります。案外、幼児ばかりでなく、昔はナンバ歩きが当然であったのかもしれませんが。昭和天皇の葬儀の際にも、棺を守る衛士の中に、ナンバの方がおられました。初めはナンバが正式な歩き方かと思いましたが、他の人は現在の普通の歩行でした。その方は極度の緊張によって、ナンバになってしまったのかもしれませんが。私自身、小学生低学年の頃、運動会で行進を行う直前に、ナンバにならないように、手足の準備をしていた記憶があります。現代日本人の歩き方を見ましても、西欧人に比べ、手はぶら下げ、前後にあまり振らない人が多いようです。ただし、早歩きになるとバランスをとるために、ナンバではなくなり、前後に振るようになります。元氣な年寄りほとんど、必要以上に手を振って歩いているように見られます。時代劇を見ますと、銭形平次など岡っ引きは、確かにナンバで駈けて行きます。芝居や舞踊では当たり前なのかもしれません。ナンバの場合、スタート時点では力強いかもしれませんが、その後はスピードが上

りません。同じ速度で長時間走る時には、案外ナンバの方が疲労感を覚え、安定しているのかもしれない。ところが、マラソンのようにスピードが出ません。それで捕まってしまったのかもしれない。重い刀を腰に差している時には、ナンバの方が足に力が入り、走りやすいかと思えます。しかしながら、幕府軍のように必死で逃げる場合には、自然に現在の駆け足の走法になってしまうのではないかと思います。実際に自分で試してみました。程々の速度まではやはりナンバでスムーズに動けますが、しゃにむに走ろうとしても、足の回転数が上がりませんでした。スピードを上げますと、自然にナンバを離れて、一般的な走り方に変わるものです。誰に習ったわけでもありません。昔の子どもだって、遊びの時まで、ナンバで走っていたとは思われません。「ナンバ歩きで敗北した」とは、非常に興味を惹く話ですが、疑問が残ります。

逆に数少ない雨日を見てもみすと、文久三年の天皇と諸大名の上下鴨神社参詣時・姉小路公知の暗殺日・七卿落・徳川家茂の二度目の上洛の離京時がそうです。後に錦絵・絵巻・屏風など、様々に描かれた雨中の七卿落の姿は、四年後に許されたことを知っている現代人にも、ひどく侘しさを感ぜさせるものです。京都は一年の内、雨は十〜十五%ですから、圧倒的に晴天日が多くなります。

二度も夜襲された坂本竜馬の不幸を見てわかりますように、暗殺の行われた日は、非常に寒かったり、昼間雨の降った夜など、案外条件の悪い気候であったことが多いように見受けられます。元禄十五年十二月十五日（一七〇三・一・三十一）早朝（午前四時頃）の赤穂浪士の討ち入りを考えれば、まさに悪天候下での行動であったことがわかります。雪が積もった寒い早朝であったはずですが、もっとも、防備が手薄の日であったことが悲願成就の最大原因であったことは、よく知られていることです。

幕末討幕運動の事実上の幕閉めとも、近代日本の出発点ともいえる、明治二年の天皇の東京への行幸（事実上の遷都）出発日はぐずついた天気ではありませんでした。それでも京都出発時は曇であったようです。皇后行啓の出発日は雨天であったのは皮肉のような気がします。慶応三、四年の朝廷での儀式は晴天日が多かったようです。

（参考文献）

『江戸・明治 京都の天気表 ——二條家内々御番所日次記』白石克・田口靖子編 平成十〇〜十三 慶應義塾大学三田メディアセンター 全5冊（文献シリーズ二六〜三〇）

本稿をまとめるに当たり、使用しました『二條家内々御番所日次記』の天気情報（特に幕末部分）は、田口靖子氏（元慶應義塾図書館貴重書室司書）の労苦によってまとめられた成果です。改めて、同氏に謝意を表する次第です。